

[研究ノート]

Don't just book it, Thomas Cook it. についての
覚え書き

Notes on 'Don't just book it, Thomas Cook it'

景山 弘幸

0. はじめに

本稿は表題の英文を与えられた時に考慮できる事項を整理しようとするものである。標題の英文は旅行代理店、Thomas Cook 社の旅行パンフレットに記されているものである。日本語にすれば「ただ予約しちゃうだめ、トーマスクックしなきゃ。」とでもなろうか。

まず三点気が付く。第一に、book it と Cook it が韻 (rhyme) を踏んでいること、次に Thomas Cook が動詞として用いられていること、最後に it が何を指すのか分かるような分からないようなことである。言葉は形 (音) と意味から成り立っているのだが、表題の文は音の面 (韻) でも、形の面 (動詞+it) でも意味の面 (it の指示対象) でも興味深い。今、本稿での標題の文に対する基本的態度を「言葉遊びと無限の意味作用」(池上 1982 : 12-3) に求めることにする。

言葉遊びでは、言語は何かある決まったことを伝達するための記号として関心の対象になるのではなくて、言語というものの中に潜んでいる思いがけぬ意味する力を顕在化してみるという形で、言語そのものが関心の対象になります。

表題の英文を「言葉遊び」と決め付けるかどうかはともかく、「意味する力」は確実に感ぜられる。今、現にみられる類例を (1) にあげる。

- (1) a. Don't just book it, Thomas Cook it. 旅行代理店の宣伝文句
 b. Live it. 自動車メーカー、フォード社の宣伝文句。
 c. Drive it. 自動車メーカー、BMW 社の宣伝文句。

(1) の文の共通点は動詞の直後の位置、つまり統語的目的語の位置に *it* が生起していることである。また、動詞に着目してみれば *it* の直前の動詞は (1a) 前半部の *book*、(1b) の *live*、(1c) の *drive* は確かに動詞であろうが、(1a) 後半部の *Thomas Cook* は本来、固有名詞である。そこから振り返れば *book* も元は名詞である。

以下、1 節ではこの「動詞 (らしきもの) + *it*」に関する先行研究を概観する。2 節では形の面から、つまり表面上は「(主語+) 動詞+目的語」という他動詞構文をとっているという観点から考える。3 節では意味の面から、つまり *it* の指示対象 (referent) と文の意味を考える。4 節では、臨時的に名詞等からつくられる転換動詞と文構造について考える。5 節では、対応する日本語の例を考える。6 節は展望である。

1. 先行研究

この種の文、つまり「(主語+) 動詞+ *it*」はこれまでも考察の対象となってきた。三つの記述を確認しよう。

細江 (1942:269-272) では (2) の例があげられている。

- (2) a. Foot it featly here and there.
 b. Lord Angelo dukes it well.
 c. Did this companion with the saffron face
 Revel and feast it at my house to-day?
 d. ...a three-pence bow'd would hire me,
 Old as I am, to queen it.
 e. ...nature prompts them

- In simple and low things to prince it.
- f. Lucius and I'll go brave it at the court.
- g. Come, and trip it as ye go.
On the light fantastic toe.
- h. I'll prose it here, I'll verse it there,
And picturesque it everywhere.
- i. We can walk it perfectly well.
- j. So, as I was saying, being all ready for the meeting,
and no horse to ride on, I made up my mind to foot it.
- k. I would have no woman to lord it over me about the child.
- l. I will drop it on your 'ead if you don't hook it.
- m. We therefore decided that we would sleep out on
fine nights; and hotel it, and inn it, and pub it, like
respectable folks, when it was wet.
- n. Do you tram it?
- o. How is your family to avail the wife of a man who has
rough it as I have, and shall have to do?
- p. Go it, Sauly! Knock him down again!

これに対する細江の説明は、「代名詞 *it* が、動詞又は動詞として用いられた名詞又は形容詞の次に、一種の同族目的として添加」され、「16世紀以後に多く、特に通俗語にさかんである」というものである。ここにあげられている例の *it* の直前の要素、つまり動詞になっているものが (2 a) の *dukes* を除けば全て不定形つまり時制を担っていない裸の形 (*bare form*) であることに注意しておく。

Curme (1931:99) では、(3) の例があげられている。

- (3) a. You will catch it. (reproach, punishment)
b. We footed it.

- c. I am going to rough it.
- d. That's going it rather strong.
- e. I will have it out with him.
- f. He tries to lord it over us.

その説明は、以下の通りである。

In a large number of expressions the accusative object is *it*, which is originally was in many instances a concrete reference to a definite thing or a definite situation, but is now also often a convenient complement of transitive and intransitive verbs without definite reference, leaving it to the situation to make the thought clear.

要するに、「it は他動詞、自動詞の便利な補部として用いられ、その指示物は状況に委ねられている」ということである。裸の形でない動詞が、footed と going の二例あげられている。

最後に Jespersen (1933:156) では (4) の例があげられている。

- (4) a. You can walk it quite easily(bus it, cab it, foot it).
- b. To lord it, queen it.
- c. We therefore decided that we would sleep out on fine nights; and hotel it, and inn it, and pub it, like respectable folks, when it was wet.

これに関し Jespersen(1933:155-6) では、不特定 (unspecific) の it の例として次の記述がある。

The use of *it* is particularly frequent with verbs that are derived from substantives without the addition of any ending:

here it serves to mark out the verbal function distinctly.

「it は、実詞からつくられた語尾なしの動詞とともに使われ、動詞の機能を明示する働きを持つ。」ということである。Jespersen は裸の形の動詞 (without the addition of any ending) を意識している。

これらの三つの記述から分かることは二つある。一つは、問題の文の動詞が少なくとも「他動詞」、「自動詞」そして名詞、形容詞などの実詞がもとの「臨時動詞」の三種類あること、二つ目はitの指示対象がはっきりしない（「一種の同族目的」、「その指示物は状況に委ねられている」、「不特定」）ということである。

2. 他動詞構文

問題の文は「動詞+ it」という形式をとっている。生起する動詞は、他動詞、自動詞、臨時動詞の三種類ある。臨時動詞については4節で述べる。重要なのはitが目的語位置におさまって全体としては「他動詞構文」になっていることである。他動詞構文の典型は「動作主+動詞+被動作主 (Agent+Verb+Patiet)」である。やはり他動性 (transitivity) を無視するわけにはいかない。Hopper & Thompson (1980) の他動性のパラメーターの研究から、問題の文が他動詞構文をとっていることで「意図的」「能動的」「現実的」「完結的」「瞬時的」という高い他動性を担う可能性があることがうかがえる。

- (5) a. He swam across the Channel.
 b. He swam the Channel.
 c. He rode on the horse.
 d. He rode the horse. (Givón 1989:61)

- (6) a. 鈴木さんが東京から去った。
 b. 鈴木さんが東京を去った。

- c. 太郎は親元から離れていった。
 d. 太郎は親元を離れていった。 (山梨 1995:243)

(5) の例では自動詞構文の *the Channel, the horse* が単なる場所であるのに対し、他動詞構文の方が対象 (*the Channel, the horse*) に対する影響が強い。「海峡は泳ぎきられた」「馬はのりこなされた」のである。(6) の日本語の例でも「「を」格が使われる場合には、主体がこれによってマークされる対象に、能動的に働きかける傾向が強く感じられる。(山梨 1995:243-4)」という。一方、目的語に関して Hopper & Thompson (1980:253) は行為の対象が「固有」「人間(ないしは有生)」「具体」「単数」「可算」「指示的」だと個別的な行為の対象となり他動性が高くなるとしている。問題の文の *it* は少なくとも「具体」「単数」「可算」「指示的」なはずの代名詞の *it* と同じ姿である。

問題の文が高い他動性、特に動作主つまり主語の意図 (*volition*) に訴える性質を担わされているとしたら、主語の制御可能性 (*controllability*) が不可欠な命令文や根源的用法の法助動詞 (*root modal*)、たとえば「意志」の *will*、「能力」の *can* と相性がよいことが説明される。前節の例文の中にはこの説明におさまらない例もあるが、この研究ノートではあえてそのままにしておく。

3. *it* の正体

問題の文の *it* について整理してみよう。まず臨時動詞でない他動詞、自動詞の例から考える。

ある種の動詞に添える無意味な形式上の目的語として、またしばしばそれを強化する機能をもって: *fight it out* あくまで戦う / *They whooped it out.* 彼らは浮かれ騒いだ / *Hook[or Hop] it!* 《俗》逃げろ / *Go it!* しっかりやれ、頑張れ / *Confound it!* いまいましい、こん畜生
 『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』

it が他動詞構文をつくるための、その意味で「無意味な形式上の目的語」であることは前節でみた。本当に it は無意味といえるのか。

Bolinger (1977:80) は (7) の例の it を明白な環境 (obvious ambience) の it と呼んでいる。

- (7) a. Stop it! (what you are obviously doing)
 b. Don't do it! (what you are obviously about to do)
 c. Come off it! (what you are obviously insisting on)

These are cases of *it* without anaphora, *ie* without any necessary previous mention, but having a deixis ad oculos, a reference to the immediate situation. *How goes it?* (*How are things?*) is both obvious and ambient.

「先立って指すものはないが、直示的に現下の事態を指している」というのである。さらに次の言明 (*ibid.*) をみよ。

Probably the obviousness is more important than the ambience. The caller on a talk show who said *It seems to me that in the early sixties it was more fun* was inviting his audience to imagine the content of the second *it*. He could have said *things were more fun*, and in either case it would have been impertinent to ask *What was more fun?* We are supposed to know.

「It は話し手にとって聞き手がすでに知っているはずのことを指す」という。聞き手からすると先行する指示対象がないことから現下の事態 (the immediate situation) から明白な (obvious) 指示対象をさがすことになるのだ。明白だから問い直すのは不自然となる。母親が登校前の子どもに「あれしたのかい？」と言えば子どもは現下の事態の中か

ら明白なものをさがすであろう。ある時は「時間割をそろえること」であり、ある時は「はみがき」にもなる。また居酒屋で常連らしき客が「あれ、くれ」というのを新参者が聞いても、「あれって何」とは聞きにくい。現下の状況の中（居酒屋）では明白（知っているはず）なのだから。(8) もその類例とできるであろう。

(8) a. Watch it. OALD

b. Move it. 『リーダーズ英和辞典第2版』

(8a) で話し手は it の指示対象を知っているであろうが、聞き手は現下の状況から明白な危険等をさがすであろう。しかしそれを見つけても手遅れの場合も考えられる。「気をつける」しかないのだ。(8b) は軍隊の訓練場面などで使われるが、話し手も it の指示対象については意識していないのではないか。とにかく「進め！」なのだ。

目的語が意味の最も軽い it であることによって相対的に動詞の意味が強調される可能性があるように思われる。これが辞書に記載される「しばしばそれ [動詞] を強化する機能」につながるのであろう。

安井 (1983:82) は「臨時動詞 + it」を含む (9) の文が単に動作のみを表すという点で (10) の同族目的語を含む文と同じと述べている。

(9) a. You can walk it perfectly well.

b. John kings it.

c. Come, and trip it as you go.

d. Do you tram it? (安井 1983:91)

(10) a. We always sing a song when school starts in the morning.

b. She smiled a smile and up she hopped.

c. I can strike a stroke.

d. I dreamed dreams about him.

e. I once vowed a vow.

f. She blushed a blush. (安井 1983:82)

細江 (1942:271) は *it* が同族目的語の一種であると述べている。その理由は述べられてはいない。葛西 (1980:17-8) は (10) ような形容詞無しと同族目的語構文について「意味というよりは形、リズムの問題」としている。意味的貢献が薄く、実際の発話 (actual speech) では用いられず、聖書のようなリズムが重要なところで用いられているからである。葛西 (*ibid.*) は、*to lord it* のような例についても「ほかの例にくらべて意味上の理由というよりは、はるかにリズムの理由が大きいに思われる。」と述べている。ただし (10) のような同族目的語が数詞を伴ったり、形容詞を従えて副詞の機能を果たせる可能性があるのに対して、(9) の *it* にはそれら意味的貢献の可能性がないという違いがある。(10) の例は単に動作を表すのではなく、「1 曲歌う」「ちょっと微笑む」「一撃をくらわす」「何度も夢みる」「一礼した」「ぽっと頬を染めた」のように「動作 + α 」の意味を表していると思われる。一方、(9) のような臨時動詞につく *it* にはその「+ α 」の機能さえないようである。

《ある種の名詞の動詞用法の目的語として》: bus [cab, foot] *it*
 バス [タクシー、徒歩] で行く / We tried to hotel *it*. ホテルに泊ま
 るろうとした / He always lords *it* over us. いつも私たちに殿様風を吹
 かせる
 『小学館ランダムハウス英和大辞典第 2 版』

臨時動詞につく *it* の指示対象を追っても無意味なのかもしれない。形式的目的語として他動詞構文をつくる、つまり「*it* の直前の要素を動詞化する」ということでいいのであろう。いったん臨時動詞が動詞として慣習化されれば、辞書にも動詞 (foot, lord 等) として載るであろうし、語尾変化もするというのであろう。ただし、聞き手は *it* を耳にすれば、まず先行文脈に先行詞を求め、それがだめなら直示的な明白な環境 (obvious ambience) を探し、「分かったような分からな

いような」気分になる。

4. 転換動詞と文構造

これまで臨時動詞としてきたものは、臨時的な転換動詞のことである。転換動詞は名詞以外からもつくられる。例えば形容詞からの転換動詞をみてみよう。((2f) (3c) も参照。)

(11) We really roughed it on our fishing trip.

(釣り旅行では全く原始的な生活をしたものだ。)

『ランダムハウス英和大辞典』第2版

(11) の rough it の it は to lord it の it と同じく形式的な目的語として rough を動詞化しているように思える。

転換動詞が構造つまり後続する要素に依存することは影山・由本 (1997:16) で指摘されている。

名詞転換動詞を適切に解釈するためには、名詞対象についての知識に加えて、それが用いられる構文や前置詞の現われ方を考慮に入れなければならない。

(12) a. Jan Chevied to New York.

(シボレー [車種] でN.Y. に行った)

b. They 747'd to London.

(747 [ジャンボ機] でロンドンに行った)

(13) a. She mopped the floor. (床をモップがけした)

b. She mopped to the floor.

(彼女はモップに乗って床に降りた)

(12) の例では前置詞 *to* が「移動」の意味を持たせていることが分かる。(13) の状態変化動詞の場合には、(13a) のように直接目的語でなければならず、(13b) のように *to* があると「移動」の意味が強制される。

Thomas Cook it の場合、*Thomas Cook* が臨時動詞として認められるのに決定的な役割を果たしているのが、構造に頼る目的語の *it* なのである。他動詞構文となって「する」の意味あいが出てくる。構造に頼って臨時動詞になっているものには次の例もある。

- (14) a. *But me no buts.* (「しかし」、「しかし」の連発はごめんだよ。)
 b. *Professor me no professors.*
 (「教授」、「教授」と言ってくれるな。)
 c. *Uncle me no uncle.* (おじ扱いはよしてくれ。)
 d. *Grace me no grace.* (閣下扱いはよしてくれ。)
- (安井 1983:91)

(14) の例で決定的な役割を果たしているのは *me* である。いわゆる間接目的語の直前は動詞しかも典型的には *give* に代表される授与動詞である。(14a) でいえば、間接目的語 *me* の存在によってその直前要素の *But* は臨時動詞に、そして *But me* という構造がいわゆる直接目的語 *no buts* を許すのであろう。意味からすれば *me* は「利害の与格」(*dative of interest*) である。随意要素の *me* (特に話者) が言語化されると感情的色彩を帯びる(景山(1999)参照)。安井があてている日本語をみてもこれらの文が感情的色彩の強いものであることがわかる。ちなみに *No* という否定辞も感情的色彩を強めるのに一役かっている。太田(1980:373)は *No* についてこう述べている。

のっけからの否定である *no* に最も有利な文脈が、否定を除いた残りがすべて旧情報であるような繰り返し否定であるとすれば、それに不利な文脈はすべてが新情報であるような文脈で、たとえば(15)、(16) [例文番号は本稿にあわせた] のような命令文、指

示文はそうした文脈である。命令し、指示する内容は通例相手にとってすべて新情報だからである。

- (15) a. Go take your walk, but don't stumble over any rock.
b. *Go take your walk, but stumble over no rock.

- (16) a. You feel how unsteady the earth is ? -
Don't build any house here.
b. You feel how unsteady the earth is ? -
*Build no house here.

ただし Speak no evil, Post no bills のような格言的命令形では no が用いられるが、これは社会一般の行動に関する暗黙の前提があって、それが旧情報になっているからである。

5. 日本語

前節までのことから連想される日本語の事例を考えよう。動作の強調 (Live it, Drive it) という観点からは命令の「のだ」が考えられる。野田 (1997:99-102) によれば、(17) のような教示的な「のだ」は、(18) のような命令の「のだ」と同じく、「ある判断を、話し手がその場で行ったものとしてではなく、既定のものとして示している。」という。

(17) 大人は働かなきゃいけないんだよ。

(18) 働け働け、働くのだ。

(18) では「働け働け」をうけて「働くんだ」がつづく。直前の言葉が既定のものとなっている。(19) では一般的に定まっている、一般常

識を言い聞かせている。

(19) ジロー君、車に気を付けるのよ。

Thomas Cook it にあたる名詞の臨時動詞化としてはある種の「名詞する」が考えられる。影山・由本 (1997: 19) は名詞転換動詞について詳しく述べている。その中で (20) の文に関して次のように述べている。

- (20) a. 彼女はこのごろしっかり主婦している。(主婦業に励む)
 b. クラブに行くと、学生してることを実感する。

日本語には (20) [例文番号を変えてある] のような「～する」構文が口語体で使われることがある。しかし、たとえば英語の *She mothers the child.* に対応する「*その子供を母親する。」のような他動詞用法がないことからすると、(20) の表現を英語の動作主動詞と同じに扱うのは不適當だろう。日本語の「する」には「父は弁護士をしている」のように職業を表す用法があるから、そこからの類推で出来たのではないかと思われる。

さらに (*ibid.*: 11) で、「名詞る」に関し「一時な流行ないし俗語」と述べている。

日本語では名詞をそのまま動詞として用いることは基本的に無理である。日本語では動詞屈折として現在形「ーる」ないし過去形「ーた」が必要であるから、直接、名詞に「ーる」を付けた表現は一時的な流行ないし俗語と見なされる(与太→よたる、パニック→パニクる、事故る)

本稿ははなから「言葉遊び」の匂いを感じながら考えてきた。「類推」

も「一時な流行ないし俗語」も標題の英文の性質を言い当てている。日本語の「名詞る」を調べてみると名詞をそのまま動詞として用いることの出来る例が見つかった。それは「トラブる」「バトる」などのたまたま語尾が「ル」でおわる外来語を「る」で終わる動詞とみなし、「トラブった」「バトった」(争った)と過去形にもなる。

名詞の述語形式化についての本格的な研究は村木(1991:210-216)に見られる。本稿と関係しそうなところを引用しておく。

名詞を動詞化する方法には、(1)「退治る」「愚痴る」「メモる」「愛す」「訳す」のように、非分析的に接尾辞の－ruや－suをそえて派生語をつくるもの、(2)「退治する」「メモする」「涙する」「結論する」のように、動詞成分「－する」を後続させて複合動詞をつくるもの、(3)「退治を する」「メモを とる」のように、語結合のかたちをとるものがある。

「メモる」[語基+接辞] 派生語 総合的 (synthetic) 語彙的派生
 「メモする」[語基+語基] 複合語 分析的 (analytic) 語彙的派生
 「メモを とる」[語結合] 迂言的 (periphrastic) 統語的派生

見かけ上は、動作名詞にはいりにくい名詞が、語結合の中で、より慎重にいうなら、場面や文脈にささえられて、臨時的に動作名詞のような特徴をもってつかわれる場合がある。たとえば、

きょうの午後、客があります。

そろそろお茶にしましょう。

のような例では、「客が ある」「お茶に する」という語結合がとりだされるが、「客」や「お茶」は、具体名詞としてではなく、動作名詞の特徴をおびていて、これらの語結合も機能動詞結合の性質をもっていると考えられる。この場合、「客」は「来客」すなわち「客がくること」、「お茶」は「お茶をのむこと」を意味しており、動作名詞の意味特徴をそなえているわけである。(中略)

「迷子がある」「トランプをする」といった語結合も、「客がある」「お茶にする」の仲間であろうか。「客」や「迷子」がヒトとして機能しているより、また、「お茶」や「トランプ」がモノとして機能しているより、いずれの場合もコトの意味で用いられていると考えられる。

Thomas Cook *it* の Thomas Cook もモノとしてではなく「旅行業を行う」というコトの意味で用いられていることは間違いない。臨時動詞化とはモノのコト化にほかならない。

6. 展望

表題の英文は宣伝文句である。book *it*, Thomas Cook *it* の *it* は結局のところは旅行商品なのであろう。話し手にとっては既定のものでも出し抜けにつきつけられた聞き手は *it* の指示対象をさがす。先行文脈なしで現下の状況に頼らざるを得ない *it* (*obvious ambient it*) を言語化して聞き手にその指示対象（今予約するもの＝旅行商品）を既定のものとして想像させるのは宣伝として効果的である。Ford 社の Live *it*. も BMW 社の Drive *it*. も他動詞の命令文で「生きる気」に「運転する気」にさせられ、明白な環境の *it* でそれぞれの会社を意識することになる。

冒頭に指摘した三点（韻、臨時動詞、*it* の指示対象）について整理してみる。韻について言えば、Jakobson(1960) がいう言語の六つの機能のうち、メッセージに焦点をおいた詩的 (*poetic*) 機能が効果的に使われているということである。同時に命令文の形式をとることで聞き手に焦点がおかれる動能的 (*conative*) 機能も効いている。次に臨時動詞については Thomas Cook を臨時的に動詞化せしめているのが後続する *it* であることをみた。Thomas Cook のコト化により「トーマス・クックする」という意味が発生する。*it* については、book *it* の *it* は Bolinger のいう明白な環境の *it* (*obvious ambient it*) であり、Thomas

Cook it の it は二重になっているとみなせる。一つは臨時動詞化のための無意味な it (すべての形には意味があるとする Bolinger はこの it にふれていないようだ) であり、もう一つは先行する book it の it を先行詞とする前方照応の代名詞である。先行詞の it 自体も環境の it である。これが「分かるような分からないような」理由である。

日本語でも臨時的に名詞を動詞に転換する例がみられる。「名詞をする」「名詞する」「名詞る」が「do NP」「転換動詞」「名詞 it」の英語の例に対応するのかどうかは興味深い。特に日本語の「名詞る」と英語の「名詞 it」が共に臨時的で俗語であることは間違いない。しかしたとえば「俗語化の程度」のような基準を考えてもあまり意味がないのかも知れない。もちろん考えてもよいのだが、次の例は文体上、同一形式の重複を避けているだけであろう。ただし語の長さが長くなっていくことは類像性 (iconicity) の観点から興味深い。

英ファイナンシャル・タイムズ紙も「・・・・・・・・」だと評した。
ワシントンポスト紙も「・・・・・・・・」と評価した。しかしニュー
ヨーク・タイムズ紙は「・・・・・・・・」と渋い評価を下した。

(村木 *ibid.* : 214)

英語の場合も、葛西 (1980 : 17) がいうように形容詞なしの同族目的語 (vow a vow) の例が「意味より形 (あるいは音)」の問題、また標題の文に類する to lord it の it も「ほかの例にくらべて意味上の理由よりは、はるかにリズムの理由」なのかもしれない。ただし、それでも記号をおかれると「意味」を感じ、「意味」を追い求めてみたくなるのも事実である。今後も表題の文を考えていく時の指針として冒頭にも引用した池上 (1982 : 14-5) の言明をさらに引用しておこう。

以上見たいくつかの型の言葉遊びに共通して起こっているのことは、日頃私たちが安んじて住んでいる (しかし、実際には閉じ込められている) 既成の言語という住みか (言わば、一種の牢獄)

が一部破壊されて、冒頭で見た子どもの言葉遣いに現れているのと同じような、自由で捉われない眼でもって、新しい創造が起こる素地が作られているということです。少し難しい言葉を使って言ってよければ、言葉遊びは言語というものの持っている無限の意味作用の可能性に私たちの眼を向けてくれます。そして、それが一方では私たちを日常の言語という枠にはめられた世界一しばしば、惰性と偽りの安定性の上に乗っかかった世界一から解放し、他方では新しい可能な世界を私たちに教えてくれるのです。

言葉遊びの「遊び」という言葉からもうかがえるように、このような行為は何か実際的な利益と結びつくというようなものではありません。言語というものは、日頃は何かある内容を間違いなく指し示す手段としてしか価値を認められず、自らは言わばあってなきが如く透明化しています。その言語が前面に登場し、私たちの注意をまずひきつけ、そしてそれ自体が価値のあるものとしての扱いを受ける対象となるのです。そこでは、言語は何か他のあるものを表わす手段であることを止めます。当然そこではノンセンス、あるいはナンセンスの状態が生じます。しかし、ノンセンスとかナンセンスと言っても、それは日常の言語に支えられた既成の世界の基準から見ての話です。ノンセンスやナンセンスは、実は新しいセンスの創造であるかも知れないのです。それは、言語を単なる手段と見る考え方を超えたレベルで言語をそのものに内在するはずの無限の意味作用の可能性が追求されるという意味で、言語を素材とした芸術的な創造の一つの形式であり、詩人の営みと本質的には変らないものです。このような創造的行為によって開かれる新しい世界は、例えば科学が私たちに開いてくれる新しい世界とはずいぶんと性質の違ったものかも知れません。しかし、どちらの新しい世界も、私たちの生活を豊かにするのに欠くことができないものです。

参考文献

- OALD = *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. New Edition. 1995.
Oxford University Press.
- 『ランダムハウス英和大辞典』第2版. 1994. 小学館.
- 『リーダーズ英和辞典』第2版. 1999. 研究社.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Curme, G.O. 1931. *Syntax*. 丸善.
- Givón, T. 1989. *Mind, Code and Context*. Lawrence Erlbaum.
- 細江逸記 1942. 『精鋭英文法汎論』泰文堂.
- 池上嘉彦 1982. 『ことばの詩学』岩波書店.
- Jakobson, R. 1960. Closing Statement: Linguistics and Poetics.
T.A. Sebeok 編 *Style in Language*. Wiley.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*.
George Allen and Unwin.
- 景山弘幸 1999. 「話者と二重目的語構文」
葛西清蔵編『英語学と現代の言語理論』北海道大学図書刊行会.
- 影山太郎・由本陽子 1997. 『語構成と概念構造』研究社出版.
- 葛西清蔵 1980. 「'to dream a strange dream' の構造
—「同族目的語」再考—」『北海道大学文学部紀要』第45号.
- 村木新次郎 1991. 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房.
- 太田 朗 1980. 『意味論序説：否定の意味』大修館.
- 野田春美 1997. 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.
- 安井泉 1983. 「同族目的語の機能について」筑波大学『言語情報研究会』